

## 島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

いよいよ最後の章に入ります。身禊（みそぎ）1 に身禊の意味の説明があります。再び記載します。

身禊（みそぎ）または禊祓と言いますと、現在の神道信仰では、信仰によって心身を浄めるために水浴びをしたり、滝に打たれたりする行だと思われています。しかし今まで説明して来ましたように、古神道言霊学に於いては決してそういう個人の魂の清浄を求めたり、罪穢れの赦しを願ったりする小乗・自利の行ではありません。

身禊（みそぎ）とは、言霊五十音の原理に照らして、一切の文化の所産を摂取して、それぞれを人類の福祉増進に役立つよう操作・運用していく文明創造活動の根本となる行動のことを言います。自利でなく飽くまで利他の道德・政治活動のことではありません。

## 身禊（みそぎ） 2

その 496

ここに詔りたまはく、「上つ瀬は瀬速し、下つ瀬は瀬弱し」と詔りたまいて、初めて中つ瀬に降り潜きて、<sup>お かつ</sup> 滌ぎたまう時に、成りませる神の名は <sup>や そまがつひ</sup> 八十禍津日の神。次に <sup>おおまがつひ</sup> 大過津日の神。この二柱は、かの <sup>きたな</sup> 穢き繁き国に到りたまひし時の、污垢によりて成りませる神なり。

古事記に於いて「ここに詔りたまはく」と殊更に 言葉を 改める時は、行動の観点が変わることを 意味します。伊耶那岐の大神は、自らの心の構造 であります天津菅麻音図（筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原の立場で、心の中に 斎き立てた建御雷の男の神という音図が 客観世界に適用して 間違いないか、どうかの検討を始めました。その検討の初めは 禊祓とは人間に与えられた五つの性能のうちのどの性能で行えばよいかの確認です。

ここに詔りたまはく、「上つ瀬は 瀬速し、下つ瀬は瀬弱し」と詔りたまいて、

伊耶那岐の大神の精神音図 をご覧ください その母音の配列は縦にアオウエイと並びます。大神が言った「上つ瀬は 瀬速し、下つ瀬は瀬弱し」の上つ瀬とは 母音アより半母音ワに至る横の列の並びであり、下つ瀬とは母音イより半母音ウに至る並びです。

瀬とは 川の流れることで、生命の川と呼ばれる事もあります。では 上つ瀬は 瀬速し、とはどんな意味でしょうか。母音アの宇宙から現れてくる人間の精神現象は感情です。感情は自由であり、奔放ではありませんが、ともすると激しすぎて、何時も ここに身を置いて、物事に対処しようとしたのでは、身の休まる暇がなくなります。上つ瀬は 瀬速し、です。

では下つ瀬は瀬弱し、とはどうゆう意味でしょう。下つ瀬である母音イの列は人間の意志発現の世界です。その法則が言霊原理です。人間の意志というものは他の四つの性能ウオアエの底にあってその四つの性能を刺激して、現象化させますけれど、意志自体が表面に出ることはありません。やる意志はあっても、意思だけでは物事に対処するのに何もなしえません。下つ瀬は瀬弱し であります。そこで伊耶那岐の大神は上つ瀬でも下つ瀬でもない中つ瀬に入って行きました。

その 497 につづく

では心の要素のすべてを表す五十音言霊をなぜ上下百数とするのでしょうか。哲学ではさぞ難しい説明になるのですが、ここでは簡単に触れておくことにいたします。この世の中の 一切の出来事は、それを心の究極の要素である言霊の立場からみますと、光明に満ちた、いとも合理的社会なのです。しかし今の現実とはとてもその様には思われません。合

## 身禊（みそぎ） 2 の 2

その 497

**初めて中つ瀬に降り潜（かづ）きて、滌（そそぎ）ぎたまふ時に、**

菅麻音図の上つ瀬はア段、下つ瀬はイ段ですから、中つ瀬とはオウエの 三段ということになります。母音オの宇宙より経験知、ウより五官感覚に基づく欲望、エからは選択智（実践知）が現出してきます。

物事に対処して社会に生きて行くためには、必ずこの三つの性能に頼ることが 穏当です。そこで伊耶那岐の大神はこの母音言霊オウエの三つの生命の川の流れの立場より、禊祓の行為を、心に斎立てた武御雷の男神という主観的真理に従って進行させたのです。

### **成りませる神の名は八十禍津日の神**

さて人間に与えられた五つの性能のうち、上つ瀬であるア段は人間の感性・感情です。この性能は自らが生活を楽しみ、生命を謳歌して行くには誠に適した性能です。けれどこれで他人に対して、社会に対して、物事に処し文化を創造して行くには適当ではありません。

しかしまたこの性能の純粹の発露は愛であり、慈悲です。分け隔てのない心です。この純粹な慈しみの心に立つと、物事の偽りない真実の姿（実相）をよく把握することができます（飽咋の大人の神）。（あきぐいのうしのかみ）

そこで伊耶那岐の大神が自らの精神構造の菅麻音図の中つ瀬オウエの三段の生命活動の瀬に立って、自らの心の中に斎き立てた建御雷（たけみかずち）の男の神の音図を頼りに、禊祓の法について検討するとき、大神自らの立場の音図の母音の並び「アオウエイ」のうちのア段の働きの意味・内容がはっきり分かって来たのでした。それを八十禍津日の神と申します。

八十禍津日の八十は数字の八十ということです。八十は何を意味するのでしょうか。少々難解ですが説明しましょう。天津菅麻音図五十音を上下にとると下の図が出来上がります。

ワ									ア
ヲ									オ

ウ									ウ
エ				八					エ
イ				十					イ
イ				現					イ
エ				象					エ
ウ									ウ
オ									オ
ア									ア

全部で百音図です。この百数から宇宙である五の母音・半母音の合計二十数を引いた八十 がこの八十禍津日の神の八十なのです。それは 現象として現れることのない宇宙を除いた、この世の一切の現象の数を表します。

合理的な事と不合理極まることが入り交じって、一つの理論では到底見極めることができない複雑怪奇なものに思われています。何故なのでしょう。それは世の中を見る人が自ら勉強した経験知によって見て、それが世の中の実際の姿だと思い込んでいるからです。

その 498 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ） 2 の 3

その 498

禊（みそぎ）をする人の立場より見ますと、どちらが正しくて、どちらが誤っているか、ではなく、両方の立場を理解しなければ文明創造活動（政治）は実行できません。そこで言霊の立場の現象を上段に、現実の経験知による社会の見方を下段に、合計十段の言霊図をもって表すことになるわけであります。

人間に与えられた純粹の言霊アの立場に立ちますと、社会の出来事の真実の姿は以上のように八十の



究極の現象としてはっきりと看取することができます。真実の姿を見極めることは、そのそれぞれをコントロールして、文明を創造して行くためには不可欠のことです。

けれど「貴方の 真実の 姿は これだよ」と相手に突き付けたのでは、コントロールできません。「そんなに酒ばかり飲んでいては、あなたは近いうちに死んでしまうよ」と患者に言う先の例の医者態度がそれをよく示しています。相手の真相を知ること同時に、その人にどんなおう言葉をかければよいか、は別に考えられなければなりません。

禊祓を実行するために、人間天与の五つの性能のうち何に頼るべきか、ということに関して伊耶那岐の

大神のア段に対する態度が、かく決定されたのでした。

八十禍津日の神という神名がそれを示します。ア段に立って見ることができる八十の現象の実相をそのまま相手に向かって表現し伝えることは、相手を決めつけるだけで適当ではない。それは「八十禍」である。

しかしその八十の実相を禊祓の実行の土台として見定めるならば、「八十禍」は創造の光（日）の言葉の中に渡される（津）事になるであろう。禊祓を行なう伊耶那岐の大神の心の構造に名付けられた天津菅麻という音図のア段の内容と働きの意義が、かくて八十禍津日の神として規定されたのでした。

その 499 につづく

## 島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

### 身禊（みそぎ） 2の4

その 499

本文

次に大過津比の神。

八十禍津日の神とは、禊祓いの実行に当たって、言霊ア（感情）の受け持つ役割とその制限の確認であるのに対し、この大禍津比の神は言霊イのその確認であります。言霊イとは人間の創造意志発現の宇宙です。意志という性能は人間天与の四つの性能、五官感覚による欲望（ウ）、経験知（オ）、感情（ア）、実践知（工）を刺激し発動させる原動力となるものですが、それ自体は現象となることはありません。

下つ瀬は瀬弱しです。けれど人間の心の究極要素であるアイウエオ五十音言霊が存在する次元でもあるのです。この言霊の法則が存在しない限り、世界文明の創造の為の外国文化のコントロールなどできるわけのものではありません。と同時に、言霊原理の存在とその内容を披露し説明したからと言って、諸文

化のコントロールができるわけではありません。

言霊の原理は禊祓いの大前提・基礎法則ではありますが、直接それを振りかざしてはらぬものです。意志は底に秘めるので、意志の羊みの先走りは混乱の元となります。そこで言霊イというものの、禊祓に於ける意義・内容の効用と規制の確認が行われます。神明で表しますと大過津比の神ということになります。禊祓いの実行の為には、その基礎法則としておおいなるもの（大）、しかしそれを前面に押し立ててはいけないもの（禍）、そう規制することによって歴史創造の光となる（津日）働き（神）という意味であります。

以上、禊祓いの実践にあたり伊耶那岐の大神自身の心の構造に名付けられた天津菅麻音図上の言霊アと言霊イとの意義効用とその規制が確認されたこととなります。言霊アの純粹感情（感性）は禊祓いの対象となるものの真実の姿（実相）を見定める視点となる宇宙ではあるけれども、また言霊イの創造意志の言霊原理は禊祓いの実践のための重要な基礎法則ではあるけれど、しかし、双方ともその働きを直接禊祓の実効の前面に押し出すことが間違い（禍）であることが確認されたのであります。

その 500 につづく

## 島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

### 身禊（みそぎ） 2 の 5

その 500

本文

この二柱の神は、かのきたな穢しき繁しき国しに到りたまひし時の、汚垢によりて成りませる神なり。

文章そのままの意味としては、この八十禍津日の神・大過津日の神の二神は、伊弉諾尊が、妻神 伊耶那美の命を追って、高天原以外の外国に行き、その発展途上の経験知に基づく 学問・文化を体験して、その汚垢によって現れた神である、という意味です。汚垢 とは氣枯れの意で、真理そのものである



でも黄泉の国外国は萌す（黄）泉の国でもあります。競争に基づいた完成されていない混乱の学問・文化ではありますが、次から次へと湧き出る如く考案されて社会に登場してきます。高天原の精神文明以外の第二の文明である 経験知に基づいた物質科学文明を人類のもうひとつの文明として、これを摂取し、人類文明に同化して行かなければなりません。

ただ「穢<sup>きたない</sup>い」、「汚<sup>けがれ</sup>垢」とは言ってられません。それではどうしたらこれらの兆し現れてくる外国の学問・文化をコントロールして、世界人類の生命の糧として摂取して行くことができるか、の方法として、禊祓法則の確立が必要となるわけであります。

その禊祓の実践の方法の確立の中で、まず言霊アと言霊イの意義・効用の確認と、その使用・適用の

規制がはっきりと決定しました。外国の学問・文化の 処理にあたって、その実相を明らかにし、そのみで  
足れりとしてはならない（八十禍津日の神）、またその処理にあたり、コントロールのための基本法則とな  
るべき高天原の言霊原理を、外国の学問と並べて論争の具としてはならない（大禍津日の神）、という  
二点の決定です。それによって伊耶那岐の大神の音図の上での言霊アと言霊イの意義が確立されます。

「この二柱の神は、かの穢<sup>きたな</sup>き繁<sup>し</sup>き国に到りたまひし時の、 污垢によりて成りませる神な  
り。」の意味をお分かり願えたことと存じます。

その 501 につづく

## 島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

### 身禊（みそぎ） 2 の 6

その 501

ここで一言復習をしておきたいことがあります。それは伊耶那岐の大神の天津菅麻音図と斎立（いつき  
た）てた建御雷（たけみかずち）の男の神と呼ばれる音図との関係です。禊祓いの章以後は、この二つ  
の音図の立場が折り交わって出てきますので、改めてその意味を確かめておこうと思います。



伊耶那岐の大神は筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原即ち伊耶那岐の大神自身の精神構造を示す天津菅麻音図の立場に立って禊祓を開始しました。そして自らの心の中に、先に自らの心の内に自称されている建御雷の男の神という音図を斎立てました。

建御雷の男の神とは伊耶那岐の命の所産である心の一切の要素、アイウエオ五十音言霊をどう整理構成して言ったら人間最高の精神構造を得られるか、を自らの心の中に追求して、自証的ではありませんけれど結論として得られた音図です。

そこで伊耶那岐の大神は自らの心の構造である天天津菅麻音図の立場を踏まえながら、その上に物事  
一切の整理の為の音図である建御雷の男の神の音図を齋き掲げて、その建御雷の男の神という音図が、  
実際に黄泉国の学問・文化の整理することができるのか、どうかの確認の作業、すなわち禊祓いの実践に  
入ったわけです。

伊耶那岐の大神の菅麻音図とは、人間が授かった大自然そのままの心の音図です。その五つの母音は  
人間天与の五つの性能を示します。この五つの性能は、人間が生きて行く上で 何が大切で、どれが大切  
でないかということはありません。すべて平等です。

けれど外国文化の整理ということに関してはどうでしょうか。伊耶那岐の大神は自らの心である菅麻音図

についてア段の感情を振り返って、「上つ瀬は瀬速し」と自由奔放な働きを思い、この感情作用で禊祓をしたら果たしてどうであろうか、斎き突き立てた建御雷の男の神の音図上で検討し、感情という性能は外国の学問・文化を整理する上で、基礎となる働きはあるけれど、それ直接では適当でない、ということを確認し、ア段の働きに八十禍津日の神という名をつけたのでした。

同様、人間の創造意志の禊祓における働きに大禍津日の神として効用と適用制限を確認したので、八十禍津日の神も大禍津日の神も、五十音言霊の整理の途上で生まれた心的現象でありますから、言霊の神である伊耶那岐の大神の子の中に入ることは当然であります。天津菅麻音図（あまつすがそおんず）の観点に立ち建御雷の男の神の音図を検討する禊祓とは以上のようなものであります。

その 502 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

## 身禊（みそぎ） 2の7

その 502

次にその禍（まが）を直さむとしてなりませる神の名は、かみなおひ神直毘の神。次におおなほひ大直毘の神。  
次に伊豆能売。

次にその禍を直さむとして成りませる神の名は、

伊耶那岐の大神は 人間天与の 5 の性能のうち 言霊アの 感情と言霊イの 想像意志の能力によって 禊  
祓（みそぎはらい）をしたらどうであろうか、を検討しこれら二つの性能が禊祓いを実行するのに適当でな  
いことを確認しました。

そこでそれなら残された人間性能である言霊 オ（経験知）、言霊ウ（五官感覚に基づく欲望）  
と 言霊エ（実践英智）の三つの性能によってでは禊祓いの実行はどうかを建御雷の男の神三つの性  
能は伊耶那岐の大神の音図、天津菅麻音図（あまつすがそおんず）の中段「中つ瀬」にあります。

## 神直毘の神

言霊オウエの三つのうち、言霊オの宇宙より現出する人間の経験知能の働きが建御雷（たけみかずち）の男の神の音図上の上で、禊祓いの実行に如何に役立つかが確かめられた働き神直毘（かむなほひ）の神と呼びます。

言霊オから現出してくる人間の経験知からは精神的・物質的な学問科学が発達してきます。黄泉国（よもつくに）により種々雑多な論説・主張が産出されてきますが、それらの主張・主義・学問・文化をすべて人類の知的財産として合理的に整理・整頓して行く働きが神直毘の神なのであります。

## 次に大直毘の神

言霊オウエのうちの言霊ウから現出する人間の性能である五官感覚による原識、それに基づく欲望性能が禊祓の際にいかなる効用示すか、が確認されたことに対して大直毘神（おこなほひ）と名付けられました。人間の五官感覚に基づく欲望は果てしがありません。その欲望が組織化され社会の巨大な産業・経済にまで発展して行きます。

大直毘の神とはそれら多岐にわたる人間の欲望活動の全体を合理的にコントロールして行く働きがあることを確認したことであります。

その 503 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ） 2 の 8

その 503

## 次に伊豆能売

伊耶那岐の大神の精神音図である天津菅麻音図の中つ瀬である言霊ウオエうち、最後の言霊工より現出する人間性の 選択実践智が禊祓いにおいて如何なる働きができるか、の確認を伊豆能売と呼びます。

伊豆能売とは御稜威（みいず）の眼の意味。御稜威（みいず）とは大いなる人間創造生命活用の威力といった意味であります。言霊工の実践智に外国の学問・文化を整理コントロールして、人間生命の合目的性に合わせる働きがあることが確認され、それが斎き立てられた建御雷の神の言霊音図上ではっきり決定される時、この書の中で述べられます言霊布斗麻邇の原理の総結論となります天津太祝詞（音図）がすなわち人類文明創造の規範（鏡）である八咫鏡と呼ばれる精神構造図が初めて完成されることとなります。その前提として、この禊祓における言霊工（実践智）の効用の確認を伊豆能売、御稜威の眼（芽）と呼ぶのであります。

伊耶那岐の大神の音図を形成します人間生命の五つの瀬（川）について、そのそれぞれが禊祓いを  
実行する上で、適当か否か、の検討・確認が以上によって終わりました。

上つ瀬の言霊アが八十禍津日の神として、下つ瀬の言霊イが大過津比の神として両方とも不適當で  
あり、中津瀬を形成する言霊オウエそれがそれぞれ神直毘の神・大直毘の神・伊豆能売として適格であ  
ることが決定しました。

次に合格となったこれら三神が禊祓の実践においてどんな内容の働きをするかの詳細が音図上で決定  
されます。この仕事を通して、一気に言霊布斗麻邇の原理の総結論に突入することとなります。

その 504 につづく

**島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋**

**身禊（みそぎ） 2 の 9**

その 504

古事記日本文に戻ります



次に水底に滌(そそぎ)ぎたまふ時に成りませる神の名は、底津綿津見の神 次に底筒の男の命、 中に滌(そそぎ)ぎたまふ時になりませる神の名は、。 次に中筒の男の命。水の上に滌(そそぎ)ぎたまふ時に成りませる神の名は、上津綿津見の神。 次に上筒の男の命。

今までお話ししましたように、禊祓の作業も最終段階に入ってきました。古神道言霊学でいう禊祓の意味をさらに深く掘り下げて考えてみたいと思います。古事記 神代の巻きがなぞなぞの形で示す禊祓とは、現代能の神社神道が行っている水浴びや滝に打たれて魂を浄化する個人救済の業ではなく、高天原日本に保有されている言霊布斗麻邇の原理による外国の思想・文化の整理の作業であることを先に説明しました。

今はさらにその整理作業がどんな立場から成され、どんな心の持ちようによって行われるか、を考えてみましょう。

伊耶那岐の大神の詔りたまひしく「吾はいな醜（しこ）め醜（しこ）めき穢（きたな）き国に到りありけり、かれ吾は御身（おほみま）の禊（はらへ）せん」とのりたまひて、筑紫（つくし）の日向（ひむか）の橘（たちばな）の小門（おど）の阿波岐原（あわぎはら）に至りまして、禊（みそ）ぎ祓（はら）へたまひき。

古事記の禊祓の文書は上のように始まっています。この時古事記の文書の中に伊耶那岐の大神という名前が初めて出てくることにことは先にお話ししました。伊耶那岐の大神とは 伊耶那岐の神の単なる尊称の意味ではなく、主体的世界の創造主である伊耶那岐の神が、客体世界の主宰神である伊耶那美の神をも抱合した宇宙身、世界身の立場を示すために大の字を使ったのでした。この主体が客体も含んだ姿を御身（おほみま）と申します。主体だけでなく、またもちろん客体だけでもなく主体が客体を抱合した実態を御身（おほみま）と呼びます。哲学的で少々難しい表現となりますので具体的に説明しましょう。

伊耶那岐の命は妻の神伊耶那美の命との間に生まれた五十音言霊を、自らの心の中で整理し主観的心理として、建御雷神（たけみかづちのかみ）と呼ばれる音図を完成・確認しました。その後、妻神伊耶那美の命は黄泉国に客観世界の文化を建設しようと高天原（たかまはら）を出て行きます。夫神はこれを追いかけて行き、黄泉国（外国）の調和のない雑多な文化を見て、驚いて高天原に逃げ帰ります。それを追いかけてきた妻神伊耶那美の命と道引（ちびき）の岩（いは）をはさんで、「言戸（こと）の渡（わたし）し」すなわち夫婦離婚が宣言されました。伊耶那美の命は黄泉大神として外国の客観世界の文化建設の総責任者となって高原から決別します。

以上の経過の後で伊耶那岐の命は伊耶那岐の大神と変身し、御祓（みそぎはらい）をすることとなります。伊耶那岐の大神とは主観的心理体得者である伊耶那岐の命と妻神の仕事となった客観世界の学問・文化の現実の体験者との両方を一身の中に合わせ持った神、ということになります。伊耶那岐

の大神とは五十音言霊で構成される主観世界も我が身、次々と人間の経験知によって考案される物質的科学的客観世界も我が身、という主観・客観をひっくりめた宇宙世界唯一の文化創造者の立場と  
いうことである。

禊祓（みそぎはらい）とは伊耶那岐の命が主観的真理である五十御言霊原理を持って 伊耶那美の命の世界の客観的学問・文化を単に審判し、整理する、ということだけでなく、高天原に確立保存されている五十音言霊原理も、次々に考案され提出されてくる外国の文化も、人類文明創造上の 自らの中に起こってきたもの、自らの責任として、処理して行くこととあります。この事がご理解いただけますと伊耶那岐の大神が禊祓（みそぎはらい）の開始にあたり、「吾は御身（おほみま）の禊（はらへ）せん」と宣言したことの意味が明らかになってくるであります。

自らの中の主観的真理をもって、自らの体験としての客観的学問を整理し、しかも如何なる場合にもその正当性を確立している 文明の創造法則、それが現在進行中の禊祓の行法の中で確立されようとしているのです。

注一、 一つの主張を自らの経験知に照らして批判し、審判する、これは言霊才の経験知の世界の仕事である。これに対して、他の主張も自らの主張も、両方を理解した上で、人間英智の根本法則に従ってその両方の主張の調和の道の方向を指示することが言霊工より現出する実践知の立場である。

さて古事記の文章の解釈を進めることにしましょう

その 505 につづく

## 島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

### 身禊（みそぎ） 2の10

その 505

#### 次に水底に注ぎ給うときに成りませる神の名は

外国の学問文化を摂取して、これを人類文明創造の目的に沿うようにコントロールするすなわち御禊

（みそぎはらい）をするには、人間天与の五つの性能の内を上りの三つの性能が的確であることが確かめ

られました。次に伊耶那岐の大神がする仕事は、その適格であることを自らの天津菅麻の音図上で、で

言霊の動きとして、原理・原則を確立することです。

そのためには、外国の学問・文化王体験して来た自らの御身（おほみま）を、建御雷の男の神を鏡とし

て禊禊（みそぎはらい）することです。この時伊耶那岐の大神は、水底・水の中・水の上の三地点で御

禊（みそぎはらい）をします。言霊オウエの適格性の検討をするのですから、上つ瀬・中つ瀬・下つ瀬のう

ち、中つ瀬の水底・水の中・水の上ということになります。

### 底津綿津見（そこつわたつみ）の神

伊耶那岐の大神は人間天与の性能のうち、オウエの三性能が禊祓（みそぎはらい）をする上での確であることを知りました。次にこの適格であることを自身の天津菅麻の音図上で確認する仕事に入ります。中つ瀬の底と言えば、工段です。実践智です。この実践智が禊祓（みそぎはらい）においてどう働くか、の確認仕事です。言い換えますと禊祓（みそぎはらい）において重要な働きをするだろうと期待される伊豆能売（いずのめ）という人間性能を言霊音図上で確認することです。

底津綿津見の神の底津とは伊耶那岐の命の音図の横の生命の川の中のオウエの 三段の底である工

の段の流れは禊祓（みそぎはらい）の時は何処から流れているか、母音宇宙工から流れ出るのだ、という事です。

底の津（港）の意。綿津見（わたつみ）綿（わた）は渡すの意。津見（つみ）は流れ出て現れるの意。そこで底津綿津見の神全部で、水底である工段実践智の働きは、禊祓において言霊母音工（外国の学問・文化の真実の姿）より始まり、結論工（それら学問・文化のあるべき処）に渡す働きがあることを確認した、と言うことであります。外国の学問・文化の整理コントロールにおいて、実践智工が提出された主張を確実に摂取して、その人類文明史上のあるべきところに収め得る力のあることが工次元の流れの中で確認されたことです。

その 506 につづく

**島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋**

**身禊（みそぎ） 2 の 11**

その 506



次に底筒の男の命。

底津綿津見の神が工より工に渡す働きのあることとの音図上の確認であるならば、工より工に渡すためにいかなる経路を辿ることになるのかの確認、それが底筒の男の命であります。現時点 工より結果工まで音図上一本の筒またはチャンネルの形で導かれています。その筒は実際にどうなっているのでしょうか。建御雷の男の神（天津太祝詞音図）をご覧ください。出発点工より終着点工の間に現象子音がテケメヘレネ工セの八音が筒のように一筋に並んでいます この八つ現象の経過を通して出発から結果に導かれます。この経過の全貌を底筒の男の命と呼びます。

普通出発点より終着点に至る経路を示すときは時置師であるイの段のチキミヒリニイシの八つ父韻を使います。父韻とは人間が物事を創造する元となる原律であり、現象となる以前の働きです。ところが、禊祓いにおいて言霊工の実践智が外国の学問・文化を一定の処あらしめる働きの経過は 底筒の男の命に

見られますように、工段のテケメヘレネエセの現象子音の八音で示されています。

子音とは明らかに人間に意識できる後天現象の最小の要素なことなのです。

古事記にはこの底筒の男の命の他に中筒男の命、上筒男の命が三神出てきますが、以上の事を理解しますと、禊祓における行法の中のこの三筒の男の命の箇所は、言霊の学問を学ぶ上で最も重要な段階の一つであることが自覚されてきます。では何か。

それは後天現象の最小単位である三十二の子音を知る、という課題であります。

以前にもお話ししましたが人間の心を構成する言霊五十音のうち、アイウエオの五母音については概念的ではありますが、中国やインドの哲学で五行・五大と呼ばれ説明されています。また八父韻について

も、易経で八卦といい、その他八正道とか、ドイツ古代哲学で火花 Funke 等と呼ばれ、その存在が示されています。

またその消息を遠くを見るようにはありますが、窺い知ることができます。けれど後天現象の最小単位であります三十二個の子音については、今取りあげています古事記（日本書紀）以外には古今東西いかなる宗教書、哲学書にもその実相に触れたものは全く無いのであります。三十二の言霊子音を知るということは人間の心の学問の中で最も深奥の、とっておきの奥義というべきものです。

その 507 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ） 2 の 12

その 507

先に古事記は「子生み」の章で子音創生を大事忍男の神・言霊タより大宜都比売の神・言霊コまでの三十二神名として謎の形で説いております。それは人間の思い一念が言葉として一瞬のうちに宇宙を駆け廻り、発想より始まってその了解に至るまでの順序を三十二の子音言霊でもって示したものでした。その三十二の子音を指し示したのは三十二の神名あり神名はいわば概念であり、謎であり、指月の指に当たるものであります。その神名をいくら考えても、それが指し示す子音の実相に近づくことはできてもそれそのものにたどり着くことは不可能なのです。

日本語は心と言葉の最小単位である言霊の組み合わせによって出来ています。私たちが日常日本語を話す瞬間、またはその日本語を耳にする瞬間、その言葉はそれを構成している五十音言霊のそれぞれによって真の姿実相が指し示され、裏付けされています。

けれど私たちは普通そのような言霊などの存在も、またその言霊が指し示す実相も意識し理解することがなく過ごして居ます。その普段には知ることもなく、理解することもない三十二の実相子音言霊を、禊祓（みそぎはらい）の立場に立って、人類文明創造の行為を実行する時、その人の発する言葉を裏付けている実相子音が、実行者の心の内に、まさに心に焼きつくごとく明らかに自覚・了解されてくるのです。

現在お話申し上げている底筒の男の命である言霊工の実践智の活用にあたっては、その実行者の側にエメヘレネエセの八つの子音の真の姿がはっきりと印画されるごとく汲み取れることとなるのです。

そしてまた、禊祓の実行者の発する言葉が、以上のように物事の実相を構成している実装子音に裏

付けているからこそ、その言葉は整理コントロールされる外国の学問・文化にとって主観・客観両面に共に  
真実であり、誤ることない至上命令となることができます。

三柱の筒の男の命の段階は、子生みの章で神名として謎の形で示された三十二の実相子音が、初  
めて生きた人間の心の要素として人間に意識・自覚される心の行法の過程ということができましよう。筒の  
男の命が神でなくて命と表現されているのは、このシーン子音の自覚が 観念や概念としてではなく、実相と  
して生きた人間の自覚としてのみ可能であるよりであります。

伊耶那岐・美二神の子生みによって生まれた言霊五十音を、主観である伊耶那岐の命が整理してで  
きた理想の音図に建御雷の男の神と名付けました。建御雷神ではなく建御雷の男の神と男の字が付け

られた理由は、その神名によって示される理想の音図の真理性が、あくまで主観の中ののみ確認されたものであることを示したものでした。底筒の男の命の男も同様であります。一瞬の内に現れては消える光（靈駟り）である現象子音は主観であると同時に客観である事実そのものでありますが、その実相はあくまで主観の側においてのみ知りうることでありますので、筒の男と男の字が付けられているわけであります。この場合男は主観、女は客観を表します。

以上禊祓における筒の男の命の意味について、言霊子音自覚という観点よりお話をしてまいりました。私たちが日常の社会生活を営む上で、物事の真実の姿、実相を見ることの大切さと同時に、その実相そのままの言語を持つ事の幸せを心の底から知ることができるのがこの三筒の男の命の段階であります。

その 508 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ） 2 の 13

**中に滌(そそぎ)ぎたまふ時に。なりませる神の名は中津綿津見の神。**

中に滌(そそぎ)ぎたまふの中とは中つ瀬であるオウエのうちの中、即ち言霊ウの五官感覚の現識、それに基づいた欲望のことです。この天与の性能が禊祓（みそぎ）において、如何なる働きができるか、岐の命の天津菅麻音図上で検討が始められ、出発点のウから終着点のウまで物事の整理コントロールが着実に実行されることが確認されました。この確認を中津綿津見の神と呼びます。

中津綿津見の神とは中であるウの段の初めのウという港から（中津）、それを終着のウなる港に渡して「綿津」（わたつ）、結果を現わす（見）の働きという意味です。それは先に説明した大直毘（おおなおひの）神の働きの岐の命の天津菅麻音図上での確認ということができます。



### **次に 中筒の男の命。**

中津綿津見の神が人間の欲望性能の言霊が禊祓の際に果たす役割を音図上に確認したことであるの  
に対して、次の中筒の男の命は、その働きが出发点から終着点に向かって 1 本の筒のごとく一つのチャン  
ネルのような経過を経ることの確認です。その経過はウ・ツクムフルヌユス・ウの八つの現象子音で表されま  
す。

また禊祓の実行の上で、この欲望性能の生産活動をコントロールする言葉を発する時。その実行者の心  
の内に現象子音である八つのそれぞれの実相がはっきりと因果されるごとく了解されます。子音ツクムフル  
ヌユスが自覚されます。

その 509 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ） 2 の 14

その 509

水の上に滌(そそぎ)ぎ、給ふときになりませる神の名は上津綿津見の神。

水底の言霊工、水の中の言霊ウが出ましたので、残るのは水の上の言霊オの働きの禊祓上の確認です。

岐の命の天津菅麻音図上で、言霊オより発現する人間の経験知という性能が外国の学問・文化を撰

取して、これを人類文明を創造して行く上で如何なる地位を与えればよいか、を決定する働きが可能であ

る、ということを確認したことでした。

外国の学問・文化の実相を出発点オとし、それが摂取されて収まる終着点をヲとする時、オよりヲにもたらず働きが備わっていることを確認したのです。言霊オの出発点が上津であり、それを終着点言霊に渡して(綿津)成立させる(見)働き(神)という意味です。

**次に上筒の男の命。**

禊祓を実行・可能にする言葉は、出発点オより終着点ヲまで一定の筒のような、チャンネルのような一連の現象の経過をたどる形を備えています。その一連の経過の確認が上筒男の命と呼ばれます。実際には、オ・トコモホロノソ・ヲの現象を経ることになります。そして禊祓実行の言葉を発する時、その実行者の心底に八つの子音、トコモホロノソの実相がはっきりと自覚されます。

以上、底筒の男の命・中筒の男・上筒男の三筒の男の命の確認によって言霊子音、テケメヘレネエセ、ツクムフルヌユス、トコモホロノヨソ、の三次元の子音の自覚が可能となりました。この時、読者の中には、言霊子音は三二個であるから、ア段のタカマハラナヤサの八音の自覚はどうなるのか、といぶかる方もいらっしゃるかもしれません。

その事について説明しておきましょう。禊祓とは純主観の伊耶那岐の命と純客観の伊耶那美の命が一体となった伊耶那岐の大神の仕事であることは前に説明しました。主観と客観が一つになったただ一つの宇宙身、伊耶那岐の大神の御身の中の主観的精神原理によって、やはり御身の中の建設途上の外国の学問・文化を、伊耶那岐の大神が自らの体（宇宙身）を清めるという形で整理コントロールすることです。

この時、次々に湧き出てくる外国の学問・文化を自らの内に起きる事実として、全てを受け入れ、慈しみと感謝の心をもってそれぞれの処を得しめるようと努力すること、これが禊祓です。「これは良い、これは悪い」の単なる批判ではなく、すべてを生かそうとする心です。

禊祓の実行の時、外国の学問・文化に対する土台となる心そこに言霊ア段のアよりワに渡す八つの子音、タカマハラナヤサの認識・自覚が得られるのであります。

[注 1]このところの消息を日本石上神宮に伝わる布留の言本は「ウオエにサリヘテノマスアセエホレケ」と言霊をもって示している。ウオエニサリヘテ永遠とは 上中底の三箇の男の命のこと。その実行を(アの瀬)で行え、の意味である。

[柱 2] 仏説般若心境の中に「三世諸仏も。諸仏も般若波羅蜜多に依るが故に。阿耨多羅三藐三菩提を得たまえり、とある。般若波羅蜜多と言霊アの自覚（慈しみ）の境地より湧き出る智慧のこと。三藐三菩提とはウオエ三筒の男の命という人間最高の智慧の存在を暗示した仏語である。

その 510 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ） 2 の 15

その 510

古事記の本文に戻りましょう。

この三注の綿津見の神は安曇野（あづみの）連（むらじ）等が親神と、斎く神なり。かれ安曇の連等は、その 綿津見の神の子宇都志日金作（うつしひかなさく）の命の子孫なり。その底筒の男の命、中筒の男の命、上筒男の命三柱の神は、墨の江の三前の大神なり。

この三注の綿津見の神は安曇野（あづみの）連（むらじ）等が親神と、斎く神なり。

綿津見とは出発点より終着点に渡して現れる（見）という意味、阿墨（あづみ）とは明らかに続いて現れるの意で、綿津見と阿墨は此所ではほぼ同等の言葉です。

この古事記の一説から、阿墨の連の一族は後世、外国の学問・文化の受け入れとそれにより輸入される言葉を、言霊の原理に則って実相を表す大和言葉に直す役目についていた人達のことであることが推測されます。太古においては、人または一族の名前とは、それが従事していた官職・使命を表していました。

かれ阿墨の連等は、その綿津見の神の子、宇都志日金折（うつしひかなさく）の命の子孫なり。

底筒・中津・上津の三綿津見の神とは、それぞれ言霊工・ウ・オの三性能が禊祓において外国の文化を  
処あらしめる創造の言葉の働きを確認することです。ですから、その神の子とは単なる神様の子と言うので  
はなく、その働きの応用・適用といった意味です。

宇都志日金作の命の宇都志は現、すなわち現実の、意味。日は言霊、金作の金は神名（かな）、折  
（さく）は咲かせるの意。宇都志金折と全部で現実と言霊によって大和言葉を作り、世の中に流布する  
役目の人ということになります。それゆえ、その人たちの子孫で阿墨の連の官職名が推測される事にもなり  
ます。

[注一]宇都志金折（うつしかなさく）の命のことを竹内子文献には萬言文造主（よろづやふみつくりぬ



し) の命と呼んでいる。

その 511 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ） 2 の 16

その 511

その底筒の男の命、中筒の男の命、上筒の男の命三柱の神は墨の江の三前の大神なり。

墨の江の墨は統見（すみ）・総見（すみ）・澄見（すみ）等の意、江は知恵のこと、三前（みまえ）

とは、言霊学の、言い換えると、古事記神話の総結論である三貴子（みはしらのうずみこ）が誕生する

ための前提となるの意。

底筒の男の命、中筒の男の命、上筒の男の命を三神は、言霊学の総結論、人類知性の最高の規範

(鏡) であります。三貴子 (みはしらのうずみこ) (天照大神・月読命、建速須佐の男の命) が誕生する前提となる神である、ということです。

[注一]日本書紀の千引 (ちびき) の岩の章に、「特に伊弉諾尊乃ち (すなわち) その杖を投 (なげう) ちて曰く、此還 (このかた) 雷 (いかづち) 来 (く) な。是を岐神 (ふなどのかみ) という。この本の名をば来名戸 (くなど) 、の祖神 (さへのかみ) と曰う」とある。岐神 (ふなどのかみ) は、古事記では衝 (つ) き立つ船戸 (ふなど) の神と呼ぶ。その本の名は、来名戸 (くなど) の祖神 (さへのかみ) である。

来名戸とは「ここより来るな」の意と同時に九十七 (くな) の戸という意味もある。九十七の数は「墨の

江の三前」、即ち底筒の男、中筒の男中、上筒の男の三神、言霊百神のうちの手前の九十七の意味である。高天原の主観的真理と黄泉国の客観的真理探求の二つの世界の間の結界、(千引の石)とは筒の男三神が明らかにする言霊三十二の子音の自覚であることを示している。

その 512 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ） 2 の 17

その 512

三貴子（みはしらのうずみこ）

古事記上つ巻(神代巻)のお話が。「天地の初めの時高天原になりませる。神の名は天御中主の神(言霊ウ、・・・)」に始まり、九七番目の神である。底筒の男の命、中筒の男の命、上筒の男の命ところまで進んできました。

あとは言霊学の総結論である天照大神、月読の命、建速須佐の男の命の誕生を残すだけになりました。三貴子（みはしらのうずみこ）と呼ばれる三神を加えますと、ここに初めより数えて丁度百の神様が出てくることになります。

この百の神様の名前が、人の心を構成している要素である。五十個の言霊とその運用法五十個計百の原理(道)を示していますので、初めの天御中主の神より百番目の建速須佐の男の命までを言霊百神と呼んでいます。

現在の神社神道は、このことを人間社会の道德の鏡となる百の道の表徴として鏡餅（かがみもち）を

神前に飾っています。

総結論となる三貴子（みはしらのうずみこ）誕生の前提となる筒の男の三神まで、話は五十個の言霊の創成とその運用方法の確認という一連の話を進めてきたわけですが、なにぶんにも仕事が微に入り細に涉ってきましたので、読者の皆様が九十七番目の神までの話を一連の事柄として頭の中で整理し切っていってらっしゃるであろうか、と言う懸念が残ります。そこで初めから今までの話を項目ごとにまとめ、簡単なお復習をしておくことにしましょう。

#### 「天地の初発（はじめ）の時」

古事記の上巻（かみつまぎ）の初めの言葉である「天地の初発の時」とは現代科学が研究対象としているような私たちの眼前に展開している広大な宇宙や星雲、天の川、太陽、星、地球、月と言ったものがどのようにして出来たかという問題ではなく、私たち自身が自らの心を内に省みて、そこに広がっている心の宇宙、その宇宙の中に私たちの心が動き始める、その心の働きの初まり、の事を言っているのだと言うことが説明されました。

心の中の初めの動きのことの説明ですから、その心の始まる瞬間こそ、私たちが生きている今・此所であり、古神道で中今と呼びました。古事記は眼前にある外界の宇宙を説くのではなく、あくまで私達の心の宇宙、その構造と動きの内容を解いているのであります。

その 513 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ） 2 の 18

その 513

「先天の構造」

心の動きの第一の段階は、心が現象として現れる以前の心の先天構造の発現です。古事記で「天津神諸々（あまつかみもろもろ）の命と呼ばれる。この先天構造は十七個の天名（あな）と名付けられた言霊で構成されています。その十七個は母音・半母音・父韻・親音の別があります。ともに決して現象として

現れることなく、観相と思惟によってのみ把握される領域のものです。

#### 「子音創生」

第2の段階は伊耶那岐・美二神の意志の発動によって、先天構造が活動を開始し、真名(真奈)と呼ばれる後天子音三十二個の創生です。子音とは後天である目に見える現象の最小要素である。そして、先天十七個と後天三十二個の言葉が火の迦具土の神言霊と呼ばれる神代表音文字で書き表され、粘土板の上に刻み込まれました。全部で五十個の言霊が確認されました。人間精神生命を構成するのは、この五十個の言霊で、それより多くも少なくもありません。

#### 「迦具土の神の検討・整理」

第三の段階は、迦具土の神として書き現わされた人間の心と言葉の究極要素である言霊麻邇が、どのように人間の心を形造っているかの検討整理が行われました。金山毘古の神より和久産巢日の神までの操作がこの段階です。これによって言霊によって構想される人間精神の構造の初歩的内容がほぼ確認されました。心即言葉であり。心即言霊であり、さらに言葉即神であり、神即人である高天原の内容が大体確立したことになります。

#### 「建御雷の男の神の確立」

第四の段階は人間の心の構成要素が確認された言霊五十音がどんな組織を持ち、どのように働くかの、それ故五十音を人はどのように運用を活用したら良いのかの検討と確認の段階です。石折の神より闇御津羽の神までの操作がこれに当たります。この検討によって、人類文明創造上の理想の精神構造である建御雷の男の神という音図が、伊耶那岐の命の精神内容のみの真理として確立されたのでした。

その 514 につづく



## 島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

### 身禊（みそぎ） 2の19

その 514

「黄泉国における伊耶那岐・美二神の交渉と離婚」

第五の段階は、人間の主観内のみの真理である建御雷の男の神なる音図が人類文明創造上のいかなる場面に適応しても通用する主観と客観双方の真理であることを検討するための前提として、外国の文化創造の目的で黄泉国に去っていった美の命を夫神岐の命が追いかけてゆき 黄泉の国の文化に接した後、技の命が高天原に逃げ帰って来るまでの段階です。その結果、純精神心理と客観世界の真理との間に越すべからざる結界のあることを確認して、岐・美に真の言戸渡し（離婚）となりました。

「禊祓」

伊耶那岐の命は黄泉国で経験してきた外国の学問文化を心に留めながら、自ら客観世界を抱合した主観である唯一世界身である伊耶那岐のおおかみという立場に立ち、自らの内容を示す天津菅麻音図上に主観内心理として確立された建御雷の男の神なる音図を衝き立つ船戸の神の齋き立てて、御身の内容として外国の学問・文化の禊祓を実行する過程、これが第六の段階です。

衝き立つ船戸の神以下上筒男の命までがその操作であります。この操作によって、外国の学問・文化を摂取して、それぞれ人類文明創造上の処を得しめることが出来る人間精神の最高の規範鏡（鏡）の内容が、精密な五十音言霊の配列として確認されたこととなります。

以上古事記上巻の「天地の初発の時、…」より上筒男の命まで、言霊学の結論となる 3 三貴子（みはらのうずみ）の誕生の前提と内容の解明まで、言霊学の観点から人間の心の操作を段階的に復習して行きました。これよりいよいよ三貴子誕生の結論に入ります。

その 515 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ） 2 の 20

その 515

ここに左の御目を洗いたまふ時になりませる神の名は、天照らす大神。次に右の御目を洗い、たまふ時になりませる神の名は、月読の命。と次に。御鼻を洗いたまふ時になりませる。神の名は建速須佐の男の命。

人類文明を創造して行く上での外国の学問・文化の理想的処理法として、底津・中津・上津の三綿津見の神、と底・中・上の三箇の男の命との内容を確認して、言霊エウオに即した人類文明創造の最高規範（鏡）が出現することとなります。

古事記の文章には左の目・鼻・右の目と書かれていますが、これは音図を人の顔に見たときの母音の位置を示したものです。（著者太安万侶の茶目っ気躍如たるところです）では誰の音図かと言えば、もちろん、伊耶那岐の神の天津菅麻音図です。

菅麻音図は言霊アオウエイと並んでいます。そのうち、両側のアとイを除いた中つ瀬オウエを人の顔の目と鼻に見立て、図のようになります。この中で左の目に当たる言霊エの実践智の究極の完成体として、五十

音言靈布斗麻邇を運用・操作することによって、人類文明を創造して行く最高の規範（鏡） が出現します。天照大御神の誕生です。その精神構造を五十音言靈を以て表したのが、天津太祝詞（音図）  
と言い、その中心となる内容はエ・テケメヘレネエセ・エです。その内容を器物として表徴したものを八咫鏡と呼んでいます。

伊耶那岐の大神の右目にあたる言靈オ、人間の経験知・悟性です。禊祓によって人間天与の経験知の性能を活用して、人類の精神的学問・文化を整理コントロールして行く最高の精神構造が確立・確認されました。月読の命の誕生です。その精神構造の内容を言靈布斗麻邇で表しますとオ・トコモホロノヨソ・ヲとなります。

顔の鼻にあたるのは言霊ウ、人間の五感覚、またそれに基づく欲望です。禊祓の操作によって、この欲望性能を活用し、その欲望性能から生まれてくる人類の産業・経済活動を整理コントロールして、人類社会に物質的繁栄をもたらす最高の精神構造を確立・確認することができました。建速須佐の男の命の誕生です。その精神内容を布斗麻邇で表しますとウ・ツクムフルヌユス・ウとなります。

言霊エウオから発する人間の基本の性能によって、それぞれの文化の分野をコントロールする精神の鏡として誕生しました天照大御神・月読の命・建速須佐の男の命の三神を三貴子（みはしらのうずみこ）と呼びます。言霊布斗麻邇の学問の総結論です。

その 516 につづく

## 島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

### 身禊（みそぎ） 2の21

その 516

前にもお話ししましたが、古事記冒頭の天の御中主の神より建速須佐の男の命までちょうど百個の神名が出てきます。最初より五十番目の神までが心の宇宙の構成要素での言霊五十音を表し、五十一番目より百番目の建速須佐の男の命までの五十神が言霊五十音を操作して人間理想の行動規範（鏡）を作るまでの言霊操作法五十を表します。

合計百の道が神道の鏡餅の実体です。この百個学問の行程は、同時に五母音、四半母音、八父韻、(親音) から三十二の現象子音を読者ご自身の心の中で確認して行く道であることも前にお話ししました。

[注一]最初の五十神、五十音言霊を祀る宮を伊勢神宮「折釧五十鈴宮（さくしろいすずのみや）」と

言い、五十の操作法を祀る宮が、大和の石上神宮である。石上神宮に太古より伝わる「布留（ふる）の言本（こともと）」日文四十七文字は言霊四十七を重複することなく用いて五十音布斗麻邇の操作法を教えている。

両児島（ふたごのしま）の島、またはまたの名を天之両屋（あまのふたや）。

以上八十禍津日の神（やそまがつひのかみ）より建速須佐の男の命までの十神が心の宇宙に占める区分を両児島（ふたごのしま）、または天之両屋（あまのふたや）と言います。両児または両屋（ふたや）の両の字があるのは、この言霊百神の誕生の最終段階において、上段の五十音言霊図と下段の五十の操作法の二つの段(両屋)が完備され。古神道の百の道の原理が完成されたからであります。この両児島で先に古事記が「島生み」の項で示した島の全部の宇宙の位置と説明とを終えたこととなります。

その 517 につづく



島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ） 2の22

その517

この時、伊耶那岐の命大（いた）く喜ばしてのりたまひしく、「吾は子を生子生みて、生みの終てに三柱の貴子（うずみこ）を得たり」と詔りたまひて、すなわちその御頸珠の玉の緒もゆらに取りゆらかして、天照らす大御神に賜ひて詔りたまはく、「汝が命は高天原の原を知らせ」と言依（ことよ）さして賜ひき。かれその御頸珠（みくびたま）の名を、御倉板拳（みくらたな）の神と言う。次に月読みの命に詔りたまはく、「汝が命は夜（よ）の食国（おすくに）に知らせ」と言依さしたまひき。次に建速須佐の男の命詔りたまはく、「汝が命は海原を知らせ」と言依さしたまひき。

禊祓の行が終わり、主観内でのみ感じられた真理である建御雷の男の神の五十音言霊音図が、名実

ともに主観・客観双方に適応して誤ることのない天津太祝詞と言われる音図として確立・認識が完成しましたので、禊祓の際の宇宙神、御身（おほみま）としての伊耶那岐の大神から、ここでは以前の伊耶那岐の命に戻ります。

そして「私は人間天与の原始の性能である天津菅麻音図神として、大事忍男の神。以下種々の言霊原理に関する神々を生んで来て、とうとう言霊原理の結論である三柱の貴子、天照らす大御神、月読の命、建速須佐の男の命を生むことが出来た」と大層喜びました。

このことを古事記の神話としてでなく、言霊原理の発見・研究の歴史という実際の問題として考えてみましょう。日本人の遠い祖先が、何時頃の時代であったか、初めて「人間には心がある。心とはなんだろう」と

いうことに関心を持ち、更に「心と言葉との関係は」の問題を考え、心の真理を求める大勢の同志との協力の下に、幾百年、幾千年という長い年月の研究の末、終に心の先天構造から後天現象の要素、その構造と動きの様相を明らかにし、結論としてこと言霊エオウの性能による人類文明創造のための最高規範（三柱貴子・みはしらのうずみこ）を発見し得た時の我々の祖先の喜びは如何に大きかったか。古事記の文章を簡単明瞭にそれを教えてください。

その 518 につづく

## 島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

### 身禊（みそぎ） 2 の 23

その 518

さらにもう一つ見方を変えて考えてみましょう。古事記は初めの天の御中主の神より九十七番目の筒の男の命まで、言霊原理の結論である。天照らす大御神、月読の命、建速須佐の男の命誕生に至るいきさつは詳しく紹介してきました。その経過はまた 1 人の人間が言霊麻邇の原理をマスターし、自覚に至る方法を明示しています。

現代人に生きる人が、古事記によって言霊学を学び、五十音言霊とその操作法を本解説に従って自らの心の中に見つめ、自らの中に言霊原理を築いていくならば、必ずやその人は三貴子（みはしらのうずみ）の精神構造を理解・自覚することが出来るであります。と同時にその人は現代社会の一員として、また遠い昔、日本と世界歴史の創造の経緯を組織した私たち祖先の霊知り達と同様の霊知りの人として、この大転換に当たる世界人類の命運を背負って立つ人となることでもあります。

言霊原理を表すこと言霊百神の道（百道・もち）はすべて整いました。伊耶那岐命の子生みの仕事は確かに終わりました。では、これで言霊神である伊耶那岐の命の話も終わるのかなと思うと、そうではありません。子生み終えた末に、伊耶那岐の命は三貴子（みはしらのうずみこ）に文明創造上に明らかな三権分立と、その運用のための驚くべき精巧な方策を用意するのです。

私たち日本人の祖先は、言霊原理の発見とその原理の運用による人類歴史の創造に関して、人間生命全般の視野と、人類の長い歴史の究極の目的とを洞察して巧妙な手段を適用したのです。それは今から説明を申し上げようとする天照らす大御神、月読の命、建速須佐の男の命に対する三権分立の処置であり、さらに言霊の原理を三柱の神の内の唯一人しか与えなかった、ということでもあります。

その 519 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ） 2 の 24

その 519

三権分立

すなわち、その御頸珠（みくびたま）の玉の緒ももゆらに取りゆらかして、天照らす大御神に賜ひて詔りたまはく、「何時が命は高天原を知らせ」と、言依さして賜ひき。かれその御頸珠の名を、御倉板拳の神（みくらたなのかみ）といふ。

伊耶那岐の命は言霊エオウの性能に即した最終的結論に基づいて、天照らす大御神・月読の命・建速須佐の男の命の三柱の神に人類文明創造上の三つの領域をそれぞれ分担主宰する 責任体制をはっきりと定めたのです。

天照らす大御神には高天原を、月読の命には夜の食国を、建速須佐の男の命には海原を知らせと言う命令です。このことを古事記三柱の貴子の三権分立と呼んでいます。

高天原とは言霊麻邇で結界され、言霊原理の幸倍う（さちほう）純粹の大和言葉に表現されるところの人間精神の中枢領域のことです。そして「その御頸珠（みくびたま）の玉の緒ももゆらに取りゆらかして、天照らす大御神に賜ひて・・・」とありますように、高天原を知らず手段・自覚としての五十音言霊の自覚を天照らす大御神にだけ授けたのでした。御頸珠（みくびたま）の頸（くび）とは組（く）む霊（ひ）の謎です。霊とは言霊のこと。それを組んで大和言葉をつくります。「御頸珠の玉の緒」とありますから、五十音言霊のこと。それを糸でつなげ、口ザリオにしたもので、三種の神器のうちに八坂の勾玉（やさかのまがたま）にあたります。

「その御頸珠の名を、御倉板拳の神という」とは、御倉板拳（みくらたな）とは御厨（みくりや）の棚の意で天照らす大御神が知食（しろしめす）す精神の食べ物を並べて置く台所の棚という謎でありましょう。五十音言霊音図の事を指します。

さて、伊耶那岐の大神は、前段の禊祓いにおいて三柱の貴子の中心となる精神内容を、それぞれエ・テケメヘレネエセ・エ、オ・トコモホロノヨソ・ヲ、ウ・ツクムフルヌクス・ウの三箇の男の神として言霊布斗麻邇によって確認しています。ですから、伊耶那岐の命は天照らす大御神に言霊原理を表す御頸珠与えて高天原を治めよ、と命令したことは了解できます。けれど同様に言霊をもってその中心内容を確認した月読みの命、建速須佐の男の命に言霊原理を与えることがなかった、ということはどう解釈したらよいのでしょうか。

その 520 につづく

## 島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

### 身禊（みそぎ） 2 の 25

その 520

次に月読の命に詔りたまはく、「汝が命は夜（よ）の食国（おすくに）に知らせ」と言依さしたまひき。

月読の命には、「夜の食国を自らの統治の領分として治めよ」と命令しました。の意。 月読みの命の

実体は言霊布斗麻邇でオ・トコモホロノヨソ・ヲと確認されています。ですから、月読み命に天照らす大御



神同様言霊原理が与えられるならば、月読み命とその実態とその表現である言葉は表裏一体のものとなるわけです。

実相即言霊の原理が通用します。ところが月読み命には言霊原理が与えられませんでした。その結果はどうなるでしょうか。月読み命という名前の由来がそこから出てきます。月読みの月は附属するの意。誰に附属するかというと、高天原の言霊原理に附属して、それを読む、すなわち説明するの意となります。また、太陽に譬えられる天照らす大御神の光を受けて照る月の如く、実体である言霊麻邇をうっすらぼんやりと映し出す領域とも表現できます。

言霊麻邇を使わずにその実体を表現・説明するために、経験知に基づく概念とか、表徴、比喩等などを用いられることとなります。人間の経験知による概念・比喩・表徴等に基づく物事の判断・説明は、一面

一面が歪んだ多面鏡の像のごとく、どんなに詳しく映し出そうとしても、物事の実体そのものを捉えることができない、という宿命を背負うこととなります。しかし、この言霊オより現出する働きも人間に与えられた性能の一つとして、その領域が定められたのでした。

その 521 につづく

## 島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

### 身禊（みそぎ） 2 の 26

その 521

次に建速須佐の男の命詔りたまはく、「汝が命は海原を知らせ」と言依さしたまひき。

建速須佐の男の命とは、竹（建）が凄まじい(須佐)速さで伸びていくような心（男）の人意に解釈できます。言霊ウから現出する現象である人間の欲望は、これで良いということのないすさまじいものです。この人間の五官感覚に基づく欲望性能が、やがて産業・経済を発展させることとなります。海原（うなばら）とは言霊ウの名の領域、即ち物を生産する世界を意味するのでしょう。

また、須佐（すさ）の男の須佐とは主（す）である天照らす大御神を佐（たす）ける、と読むことができます。須佐之男命が主催する産業・経済がやがて、大きな発展を遂げた暁、主である天照らす大御神の高天原の五十音布斗麻邇の精神原理とともに、車の左右の両輪の一つとなって、人類の福祉に貢献することができる分野でもあるわけです。

建速須佐の男の命の働きの実体はウ・ツクムフルヌユス・ウと確認されていますけれどこの命にも言霊原理は授けられませんでした。その結果、この命の海原の領域が用いたものは数の原理でありました。

以上で、古事記神話が告げる言霊百神の謎解きの話を終了することといたします。五熟読ありがとうございました。最後に、私たちの祖先が言霊原理を発見し、三貴子に与えた三権分立の制度が、人類の実際の歴史の中で、どのように移り変わっていったか、をお話ししましょう。

その 522 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ） 2 の 27

その 522

人間の精神内における三貴子の三権分立が定められてから長い年月が経ち、人類の歴史の幾多の変遷の後、その精神的三分担は、地球上の三領域の分担として現れてきます。天照大御神は高天原、心として日本人の精神の中枢部に潜在意識として、場所としては日本の皇室の賢所に天皇家の秘密と成り、保存・伝承され、やがて来たるべき第三文明時代建設の成否の鍵として活用の出番を待つこととなりました。

月読命は、自らの言霊オの分野に言霊アの分野を結び付け、その概念・比喩・表徴の手段を用い

て人類の宗教、哲学、芸術の文化を作り上げていきます。その活躍の地域は主として東洋であります。

須佐之男命は自らの言霊ウの性能に、言霊オの経験知を客観世界に取り入れて、自然科学と産業・経済を発展させました。その活動地域は最近まで西欧でありました。以上、三貴子の精神的三権分立は、歴史の進行とともに地球上の三区分別（日本、東洋、西洋）として発展しました。

言霊原理は天照大御神にのみ与えられました。その結果。大御神は自らの高天原はもちろん、月読み命の宗教、哲学、芸術の分野と、須佐之男命の自然科学、産業、経済の分野の状況とを、すべて麻邇の相において把握・統括し、世界文明創造の神として。日本の高天原に君臨しています。言霊原理は言霊工に於いてのみ運用することができるものだからです。

その 523 につづく

## 島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

### 身禊（みそぎ） 2 の 28

その 523

#### 後日譚

古事記神代巻の最初に現れる天の御中主の神より三貴子（みはしらのうずみこ）天照大御神・月読命・須佐之男命の誕生とその三権分立までで、人間の心の構造である言霊五十音とその操作方法五十、計百個の原理を示している所謂言霊百真の謎解きは全て終わりました。現在神社神道が、御神前に供える上下二段の鏡餅（百道・もち）に関する内容とその理解はすべて完成したことになります。ところが、古事記の最後の章「身禊・みそぎ」には三権分立の記事の後に数行須佐之男命の反逆の事件が付け加えられています。そこで、この神話の謎解きのお話を「古事記と言霊」の後日譚としてお話することにします。

まず、古事記の文章を載せます。

かれおのも、おのもよさし賜へる 命のまにま知らしめす中に、速須佐之男の命、依さし賜へる国を知らせず、八拳須心前（やつかひげむなさき）に至るまで、啼きいさちき。その泣く状（さま）は、青山は枯れ山なす 泣き枯らし河海（うみかわ）は悉くに泣き乾かしき。ここを以ちて悪（あら）ぶる神の音なひ、狭蠅（さばえ）なす皆満ち、萬の物の 祆（わざわい）悉くに発（おこ）りき、かれ伊耶那岐の大神、速須佐之男の命に詔りたまはく、「何とかも汝は言依させる国を治（し）らさずて、哭きいさちる」と詔りたまへば、答へ白さく、「僕（あ）妣（はは）の国根の堅州国（かたすくに）に罷からむとおもうがからに哭く」とまをしたまひき。ここに伊耶那岐の大神、大（いた）く忿（いか）らして詔りたまはく、「然らば、汝はこの国にはな住（とど）まりそ」と、詔りたまひて、すなわち神逐（かむやら）ひに逐（やら）ひたまひき。かれ伊耶那岐の大神は淡路の多賀にまします。

字句を追って解釈を進めていくことにしましょう。

かれおのも、おのもよさし賜へる 命のまにま知らしめす中に、

日本人の祖先の長い年月の研究と努力の末に、言霊布斗麻邇の原理が天照大御神・月読命・速須佐之男命の三貴子（みはしらのうずみこ）の誕生と、その人間精神界における三権分立として確立されました。

天照大御神の高天原とは、言霊布斗麻邇によって結界された清浄無垢な精神の中枢の世界、月読命の夜の食国（おすくに）とは麻邇の原理を使わずにその消息を概念・比喩・象徴等をもって表現し説明する領域、速須佐之男命の海原（うなばら）とは、高天原の生命調和の精神に則った物質生産のその分配の仕事の世界であります。



この三者は精神の三位一体をなし、天照大御神が正位、月読み命は右の座、建速須佐の男の命は左の座に位して、高天原日本に於いて三位協力して長い年月の間、平和な精神文明時代を作り上げていったのです。

その 524 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ） 2 の 29

その 524

速須佐之男の命、依さし賜へる国を知らせずて、八拳須心前（やつかひげむなさき）に至るまで、啼きいさちき。

三貴子の三位一体の協力による精神文明時代は、邇邇芸王朝（ににぎみおうちょう）・日子穗穗出

見王朝（ひこほほでみおうちょう）と長い年月が経過しました。そして時代は鵜草葺不合王朝（うがやふきあえずおうちょう）の時代に入ります。

ここに至って、その時まで高天原の調和の精神のもとで、物質世界の生産・分配の仕事に重視していた速須佐之男命の心の中に高天原の精神とは全く異なった心が沸き起こってきたのです。「姉君天照大御神の言霊の原理は、人間の心の原理法則としては完全無欠のものです。けれど私が分担を命ぜられた海原（うなばら）の物質世界を研究するためには、麻邇の原理とは全く別個の原理と方法があるように思えて仕方がない。私はどんな事をしてでも、この領域の真理を究めたい」と思ったのです。そして高天原の三位一体の自らの分担の仕事には見向きもしなくなったのです。

「八拳須心前（やつかひげむなさき）に至るまで、啼きいさちき」とある八拳須（やつかひげ）の須

（髭・ひげ）とは靈氣（ひげ）の謎です。靈は言靈、その気ですから、父韻を指します。八拳とはこの場合、八つの父韻を示します。心前（むなさき）に至るまで、永遠とは自らの心に満足するまで、の意。啼きいらちきとは、八父韻は古事記前文にあります、鳴（な）き沢（さわ）ぐ神でありますので、その八つの父韻の配列をどうしたらよいか、声に出して探ってみた、の意です。

高天原精神界の基本の心構えは父韻チキミヒリニイシ（たかまはらなやさ）と示されます。この心構えは一切のものを摂取して、これに処を得さしめる精神です。ところが。速須佐之男命は物質とは何かを探求するためには、この調和の心構えでは適当でないことに気が付いたのです。物事を操作して出発点より結論に導く手順を示す八つの父韻の配列を、高天原従来配列の心構えとは全く違った配列を求めて、新しい研究手法を探って、タカマハラナヤサの配列を目茶苦茶にする行いを始めたのです。

その 525 につづく

島田正路氏著書「古事記と言靈」より抜粋

## 身禊（みそぎ） 2の30

その 525

その泣く状（さま）は、青山は枯れ山なす 泣き枯らし河海（うみかわ）は悉くに泣き乾かしき。ここを以ちて悪（あら）ふる神の音なひ、狭蠅（さばえ）なす皆満ち、萬の物の 祓（わざわい）悉くに発（おこ）りき、

高天原は一切のものを摂取してそれぞれに処を得しめる大調和の世界です。そこにすべての前提条件を廃除をして、唯現象を自らの経験知に従って破壊分析して、その性質を探る法則は何であろうと、速須佐之男命の活動（泣く状）は猛烈を極めたのでした。

「青山は枯れ山なす泣き枯らし、河海は悉くに泣き乾かしき」速須佐之男命の研究願望は、破壊を愆（ほしい）ままに、高天原に從來にない異物をもたらす事となりました。その速須佐之男命の求める物事を処理する手法を、弱肉強食の世相を表す天津金木音図のア段アカサタナハマヤラワの配列から悪（ア

ラ) ぶる神と呼びます。この悪ぶる手法が高天原の此所・彼処に起こり、それは丁度 5 月の蠅の群がる

(狭蠅・さばえ)のごとく高天原に種々の調和を乱す事が起こりました。

かれ伊耶那岐の大神、速須佐之男の命に詔りたまはく、「何とかも汝は言依させる国を治 (し) らさず

て、哭きいさちる」と詔りたまへば、答へ白さく、「僕 (あ) 妣 (はは) の国根の堅州国 (かたすくに)

に罷からむとおもうがからに哭く」とまをしまひき。

そこで、伊耶那岐の大神は速須佐之男命にただしました。「お前は分担を命令されたと海原の仕事 (ウ

の名の原)をおろそかにして、なぜ無茶苦茶な手法を採って騒ぐのだ」と。速須佐之男命は 答えました。

「私自身、物とは何かを研究する破壊の手法は、調和世界の高天原で行うべきでないことは知っています。ですから、高天原を去って行った母親伊耶那美の命の根の堅州国（かたすくに）に行き度いものと、泣いているのです」と。

根の堅州国とは音（ね）の片州国（かたすくに）の意。音は言葉。言葉を分ける主観と客観の片方である客観世界の言葉が静まっている州（す）の国。即ち黄泉国（よもつ）外国のことである。

その 526 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

身禊（みそぎ） 2 の 31

その 526

ここに伊耶那岐の大神、大（いた）く忿（いか）らして詔りたまはく、「然らば、汝はこの国にはな住

（とど）まりそ」と

「忿（いか）らして」とは親神伊耶那岐の命が命令を聞かない息子速須佐之男命の所業を「怒って」と

も解釈しうるし、また「五神・いか」らしてと解釈して、五神であるアオウエイの五母音の次元階層のそれ

ぞれの相違が起こす現実の歴史の推移により判断して、と解釈することもできます。親神は「お前が志す

物質世界探求の仕事は此所高天ヶ原で行うべきことではない。汝は外国へ行け」と言って、速須佐之男

命をは高天ヶ原より追放したのでした。

ここに速須佐之男命と呼ばれる初期の科学研究集団が日本より外国に向け出発して行ったのでした。

今より五千年以前のことであります。

かれ伊耶那岐の大神は淡路の多賀にまします。

かくて、言霊布斗麻邇の研究集団伊耶那岐の大神が自らのすべての仕事をやり終えて、淡路の多賀にお住まいになられています。淡路とは主体アと客体ワを結ぶ道、双方を箍（多賀・たが）のように締めて結ぶ働きである八父韻の原動力として活動しています、の意。。古事記のこのところの消息を、日本書紀は次の如く伝えています。

「是の後、伊弉諾尊、神功（かんこう）既にか竟（お）へたまひて、靈運当遷（かむあがりましなんとす）是かむあがりましなんとすこれをもって幽宮（かくれみや）を淡路の州（す）に構（つく）り、寂然（しずかた）長く隠れましき。亦曰く、伊弉諾尊功（かんこと）既に至りぬ。徳（いきおい）なお大いなり。是に天に登りまして、報告（かへりごと）したまふ。仍（すなわ）ち、日の少宮（わかみや）に留まり宅（す）みましぬ。」



神功（かんこと）とは言霊布斗麻邇百神を生んだ仕事のこと。淡路の州（す）とはアとワの間の交流によって生まれてくる言霊百神の原理を生み、その証明と自覚とをすべて成し終えて、それが言霊入（州・皇・静・巢）の姿に落ち着いた心であります。その心は言霊原理出発の心であり、また原理完成後の心でもあります。日の少宮とはアオウエイ五母音宇宙のこと。全ての現象はここより出でて、ここに帰って消える。日の湧く宮でもあります。伊弉諾尊は、この五母音宇宙の中に永遠に留まり、宅（す）住んでいらっしゃるのです。

古事記は速須佐之男命の反逆と高天原からの追放を語るこの一節を、次に続く天照大御神と速須佐之男命の「警約（うけひ）」によってさらに詳しく説明しています。その上で黄泉国に物質文明創造のために出発して行く速須佐之男命の基本精神の構成を「穀物の種」になる短い挿入文によって呪示する章へと続くこととなります。

「古事記と言霊」の抜粋はおわりです。

長らくありがとうございました。

